

## 初期の習禪者達 (二)

——大禪定寺の習禪者

沖 本 克 己

## 一

初期禪宗は從來、達摩の面壁伝説や慧可の嗣法、北周廢仏に於ける故事、さらには僧璨の虚構などに見られるごとく、山岳仏教の性格を濃厚にもつものと考えられがちであった。たしかにシナ仏教そのものには当初から、一方で山居隱棲思想が見られ、これらはシナ文化そのものの特色と軌を一にし、その中でシナ独自の仏教形態が醸成されていたのも事実である。しかし強固な国家管理の下に、都市に展開した仏教の諸型態も見逃すことは出来ず、むしろ歴史的には常に都市仏教が主流であった。そしてそのことは禪宗史についてもあてはめることが出来、敷衍して云えばシナ仏教史が都市仏教と山岳仏教の交番の歴史である如く、禪宗史もまた都市仏教と山岳仏教の交番の歴史であると考えられる。そして特に初期の禪宗史は都市型仏教であり、正確には禪宗の自覚をとまなわれない、いわば禪宗成立前史の範疇に入るのではないかと考えられる。

本稿は以上の如き作業仮説の下に、先に発表した試論と関りつつ、初期禪宗史を再認識せんとする試みの一部である。

『魏書』釈老志には次の様にいう。

世宗篤好仏理、毎年常於禁中、親講經論、広集名僧、標明義旨、沙門条録、為内起居焉。上既崇之、下弥企尚、至延昌中、天下州郡僧尼寺、積有一万三千七百二十七所、徒侶逾衆。<sup>(c)</sup>

ここに世宗とは宣武帝(四九九即位)を指す。太和八年(四九四)の洛陽遷都後、北魏仏教は空前の繁栄を示した。その大きな特徴の一つは多数の渡来僧による新たな典籍の伝訳と彼らのもたらした具体的実践方法の導入である。

『洛陽伽藍記』は当時の渡来僧について次の様な描写を残す。

異国沙門、咸来輻輳、負錫持經、適茲楽土、世宗故立此寺以憩、房廡連亘一千余間、庭列脩竹、簷弘高松、奇花異草、駢闐塔砌、百国沙門三千余人。<sup>(d)</sup>

この盛況は、塞外民族である鮮卑族拓跋氏の調和政策、特にその中でも大きな比重を占める崇仏策によるものであるが、他方、匈奴の侵入によるインドグプタ王朝の崩壊と連動する歴史現象でもある。

のちにシナ禪宗の初祖に擬せられる菩提達摩(一五三五?)も中原の民族大移動の影響でシナに流入した渡来僧群像の中に位置し、北魏帝室の庇護の下に洛陽に展開した都市型仏教の構図の中で理解さるべき存在である。<sup>(e)</sup>

しかしこの洛陽の繁栄は永熙の動乱(五三四)によって灰燼に帰し、そのことは『伽藍記』に次の如く記されてい

る。

暨永熙多難、皇輿遷鄴、諸寺僧尼亦与时徒、至武定五年歲在丁卯、余因行役重覽洛陽。城郭崩毀、宮室傾覆、寺觀灰燼、廟塔丘墟、牆被蒿艾、巷羅荊棘、野獸穴於荒階、山鳥巢於庭樹。<sup>(4)</sup>

禪宗二祖とされる慧可は、『統高僧伝』によれば、達摩の晩年に洛陽で四〇六年間師事し、師の没後、相州を経て天平（五三四～五三七）の初めに東魏の鄴都に移り、のちに北周の廃仏（五七四～五七八）に会ったとされる。<sup>(5)</sup> これによる限り、慧可は北魏から東魏への動乱期における孝静帝の遷都の動きに完全に対応しており、従ってその仏教もまた都市型仏教であったことが確認される。

北周のあとを受けた隋は、『弁正論』に、

開皇三年詔曰、朕欽崇聖教、念存神宇、其周朝所廢之寺、咸可修復。京兆太守蘇威奉勅、於京城之内、選形勝之地、安置伽藍。於是合京城内、無間寬狹、有僧行処皆許立事。<sup>(6)</sup>

とある如く、仏教再興政策をとり、その盛況は次の如くに記されている。

自開皇之初、終於仁壽之末、所度僧尼二十三万人、海内諸寺三千七百九十二所、凡写經論四十六藏、一十三万二千八十六卷、修治故經三千八百五十三部、造金銅檀香夾紵牙石像等、大小一十万六千五百八十軀、修治故像一百五十八万八千九百四十許軀、宮内常造刺繡織成像及画像、五色珠襪五彩画襪等不可称計、二十四年營造功德、弘羊莫能紀、隸首無以知。<sup>(9)</sup>

隋朝の仏教偏重は顕著なものであるが、それらはシナ仏教史を貫通する国家仏教としての性格に添うものである。しかし、こうした意図とは別に、その政策は、北周の廢仏によって潜流と化し、潜流することによって却って純化し、蓄積された仏教的エネルギーを開放する機能を果たした。そしてまた南北朝の統一は、南地の観念的な教学仏教と、北地の渡來僧の主導による実践仏教を止揚して、シナの仏教の成立を促進したが、このことは隋代における渡來僧の激減にも対応する。さらにまた国家仏教は必然的に都市仏教の様相を呈するが、その中心となるのが仏教都市長安であり、大業末年の洛陽の荒廢によってそのことは一層加速された。

こうした状況の下で、その中心的役割を果たしたのが曇遷（五四二—六〇七）であり、本稿は、隋文帝の仁壽三年（六〇三）の勅に、

自稠師滅後、禪門不開、雖戒慧乃弘、而行儀攸闕、今所立寺既名禪定、望嗣前塵、宣於海內召名德禪師百二十人各二侍者、並委遷禪師搜揚。

とある点をとらえ、都市仏教の典型の一つを示す場としての大禪定寺における様々な実践家の動向を概観せんとするものである。それはまた初期禪宗史を都市型仏教の範疇でとらえなおす立場から、当時の長安における実践家やその思想の諸相をあとづけることを目的とするものである。

### 三

大禪定寺の創建については諸説があるが、大別して二種に分れる。即ち一つは皇后独孤氏の崩御を追慕して建てられたとする説であり、今一つは文帝の崩御の後に建てられたとする説である。曇遷伝には、

及献后云崩、於京邑西南置禪定寺、架塔七層、駭臨雲際、殿堂高竦、房宇重深、周閭等宮闕、林圃如天苑、挙国崇盛、莫有高者。

とあり、皇后独孤氏の崩御は『隋書』によって仁寿二年(六〇二)八月と確められるから、先に見た如くその創建は仁寿三年(六〇三)と考えられる。同様の説をとるものに、保恭伝、慧因伝、僧鳳伝、慧超伝、慧斌伝、明馭伝、があり、『釈氏稽古略』もこの説に従う。

文帝の崩御にともなう創建とするのは、靖玄伝に、

会高祖昇遐、鬱興禪定、遂応詔住焉。

とある他、童真伝、善曹伝、宝襲伝、法性伝、に見える。一方、明瞻伝には、

但下勅於両禪定、各設尽京僧斎。

とあり、また『法苑珠林』に、

煬帝。……長安造二禪定、并二木塔、并立別寺一十所。

とあることから、長安には大禪定寺が二つあったことになる。

この兩者を今、仮に仁寿禪定寺、大業禪定寺と称するならば、まず仁寿禪定寺は、保恭伝によれば、武徳二年下勅召還、依旧檢校、仍改禪定為大莊嚴、及拳十徳、統撰僧尼。

とあり、武徳二年（六一九）にその名が大莊嚴寺に変わったとし、智興伝にもそのことが窺えるが、無礙伝では

（大業）十三年、州破入京住莊嚴寺。

とあり、慧銓伝では、

及武徳初載、方還京輦住莊嚴寺。

とあり、この兩者からは六一七年一月と知られ、寺名変更の時期に混乱が見られる。一方、道岳伝、智首伝には、

住大禪定道場、今所謂大總持寺是也。

とあり、大禪定寺が大總持寺に寺名変更されたことが記される。その時期は不明であるが、静琳伝には、義寧二年（六一八）に大總持寺に住した記録があるから、『統高僧伝』の記述を信する限り、それは六一八年以前ということになる。

以上の諸説を総合すれば、大禪定寺は二つあり、六〇三年および六〇五年にそれぞれ創建され、唐朝の成立（六一

八) にもなつて、大莊嚴寺、大總持寺とそれぞれ寺名が改められ、その性格も実践道場から、僧尼を統括する機構の一部に変化した様である。従つて本稿の目的に沿う期間は六〇三年から六一八年の間、即ち大禪定寺であつた時期に限定される。

しかし、これで禪定寺の名称をめぐる問題がかつた訳ではなく、例えば『宋高僧伝』には、大莊嚴寺、大總持寺の他に、禪定寺の名が見え、『酉陽雜俎』にも、楚公姜皎(六七三〜七二二)が、かつて禪定寺に遊んだという記述があり、八世紀初めにも長安には禪定寺があつたことが知られる。ただし、ここでは資料不足のためこれ以上追求することは不可能なので注記するにとどめ、『宋高僧伝』慧靈伝に、

大中七年、宣宗幸莊嚴寺、礼仏牙、登大塔、宣問耆年、乃賜紫衣、其年六月勅補靈、為新寺上座矣、帝望寺西北廃總持寺、乃下勅曰、朕以政閑、賞景幸于莊嚴、其寺複殿重廊、連甍比棟、幽房秘宇、窈窕疏通、密竹翠松、垂陰擢秀、行而迷道、天下梵宮、高明寡匹、当建之時、以京城西昆明池勢微下、乃建木浮图高三百尺、藩邸之時、遊化伽藍、觀斯勝事、其總持寺大業中立、規制与莊嚴寺正同、今容像則毀、忍草隨荒、香徑蕪侵、尚存基址、其寺宣許重建。

とあることから、逆に二つの禪定寺は互いに近接して、ほぼ同一の目的、即ちシナ全土の秀れた実践家を集め、大興善寺に対置せしめることによって仏教を総合化すること、を志向するものであると仮定して、以下にその概観を試みたい。

#### 四

一、積靖玄(五六九〜六一一)、姓趙氏、天水人。「澄練一心専宗經部」とするも学系は不明。令旨によって長安に

来たり、大興善道場に法会を開き、璨法師と交渉があった。のち禪定寺に住するが、大業中創建ののちの総持寺の方らしい。

二、釈智閑(五四〇～六一四) 姓氏は不詳、襄陽人。「無師独悟、自然厭世」とあり、当初より実践家であった。鄴都に仏法の盛行する様を見て、曇遷に『十地経』を学んだ。曇遷は曇遷に仏法の綱要を授けている。のち『華嚴』涅槃』を学し、慧光の『四分律』を聴き、僧弁から三論をうけ、大業の初め慧日道場に住し、長安に移って禪定寺に卒した。

三、釈智凝(一六〇五一)、姓氏は不詳、予州人。具戒以前にすでに衆経を誦すこと数十万言であった。靖崇(五三七一六一四)に師事して『撰大乘論』を学し、その疏を著した。長安弁才寺に講義をし、のち禪定寺に移った。

四、釈靈璨(五四九一六一八) 懷州人。淨影寺慧遠(五二三一五九二)の後継者。『十地経』『涅槃経』等に通じ、開皇十七年(五九七)勅により、慧遠のあとを襲って大興善寺の衆主となった。洛陽淨影寺の他、勅によって長寿寺、景浄寺を経て大禪定寺に住した。

五、釈僧朗(一六一七) 恒州人。『大智度論』『雜心論』を学す。禪定寺に住して講習に努めた。

六、釈智梵(五三九一六一三) 姓は封氏、渤海條人。靈簡禪師に師事、鄴都で『大智度論』『十地経』を学した。仁寿末年、勅を奉じて宝香寺に置塔し、大業五年(六〇九)勅により禪定寺に住した。「静縁撰想、無替喧寒」であったという。

七、釈普曠(五四八一六二〇) 姓は樊氏、扶風郡人。円禪師に依止し、頭陀行を専らとした。義解に異才を発揮し、周武の廃仏に抗したが、却って通道観の学士に任ぜられた。大象初年(五七九)制せられた菩薩僧百二十人の一人となり、興善寺に居して、玄都観の道士と論争してこれを破った。隋高祖の崩御によって建てられた禪定寺、即ちのちの総持寺に召されて居し、大業末年には僧綱となった。基本的には「頭陀自静、夜宿寒林」の人であったが、結局は



帝室と最も近い所に居つづけることとなった。

八、釈保恭、<sup>(44)</sup>（五四二～六二二）姓は崔氏、青州人。曇法師（茅山明法師）に出家し、開善寺徹法師に『成実論』を聴いた。のち慧暉禪師の下で定業を習し、印可をうけた。また『成実論』を聴いて余悟があったが、更に疑問を生じ、曇崇（五一五～五九四）の下で漸く解決した。この間『地持經』『十地經』『法華經』を習得し、陳の至徳初年、攄山慧布が北鄴に禪府を開くに及んでその懇請に従い、栖霞寺の禪宗を指導すると共に三論を学んだ。仁寿年に大禪定寺が創建されると勅により道場主となった。唐になると悟真寺に隠退したが、再び召されて禪定寺改め大莊嚴寺に居し、十徳の制を奉じて僧尼を統攝した。なお僧定伝によれば、保恭は僧定の弟子とされ、僧定は成実学に秀れた実践家であり、文帝の造寺、恐らくは禪定寺へ召されたが「業定之心、無庸世務」としてこれを拒んだという。<sup>(45)</sup>

九、釈浄業、<sup>(46)</sup>（五六四～六一六）姓は史氏、漢東随人。律を精研したが、慧遠に会って『涅槃經』等を学し、長安に随従した。のち、曇遷に『撰大乘論』を学んだ。開皇年中悟真寺を開き、また仁寿二年、景藏寺に舍利を送り、大業四年、鴻臚館に召されて藩僧を教授した。同九年禪定寺に召された。

十、釈童真、<sup>(47)</sup>（五四三～六一三）姓は李氏。曇延（五一八～五八八）に投じ、諸学に通曉したが涅槃学をもっとも善くした。開皇十二年（五九二）大興善寺に召され、梵本を翻訳し、同十六年、涅槃宗主となった。仁寿元年（六〇一）諸州に靈塔を建て舍利を送った。大業元年（六〇五）大禪定寺の造営にともない道場主に勅されたが、数年間固辞した。僧綱となったが涅槃学を本務とした。弟子に普明がある。

十一、釈靈幹、<sup>(48)</sup>（五三五～六一二）姓は李氏、金城狄道人。十四才で鄭京大莊嚴寺衍法師の弟子となり、『華嚴經』『十地經』を学した。隋初に菩薩僧に勅せられ、開皇三年、浄土寺に落髪した。海玉法師が華嚴衆に講じるのに会い、『華嚴經』を講じた。開皇七年、勅せられて興善寺に訳經し、証義沙門となった。大業三年（六〇七）大禪定寺の道場上座となった。童真と交渉があり、靈弁は猶子である。

十二、釈善胃<sup>(54)</sup>(五五〇—六二〇) 姓は淮氏、瀛州人。少にして出家し、講席をめぐり、『大智度論』『涅槃經』の注釈を著した。北齊の滅亡により陳に逃れ、講席に出かけて議論したが、その舌鋒は鋭く、講師を死に至らしめる程であった。隋起るや洛陽にわたり、慧遠に従って浄影寺に住した。慧遠の滅後、浄影寺の涅槃衆主となった。大業の造寺の時、選ばれて禪定寺に住し、法席を開いた。のち浄影寺に帰って没した。「吾一生正信心、於仏理教、無心輕略、不慮淨土不生」の語を残した。浄土教の行者である。

十三、釈宝襲<sup>(55)</sup>(五四七—六二六) 貝州人。僧休の弟子。僧休は廃仏後、菩薩僧となり、洪遵、慧遠らと共に陟岵寺に居し、開皇七年(五八七) 興善寺に入った。十大徳沙門の一人である。宝襲は十八で帰依し、經論を学したが専ら『大智度論』を宗とした。僧休に従って入京し、開皇十六年(五九六) 大論衆主となった。大業創建の大禪定寺に入りそこで没した。弟子に曇、恭、明、洪があり、『大智度論』を善くした。

十四、釈慧遷<sup>(56)</sup>(五四八—六二六) 瀛州人。『十地經論』に傾注し、のち慧遠に従い『涅槃經』『地持經』に通じた。廃仏を陳に逃れ、隨の革命によって洛陽に帰った。慧遠に従って大興善寺に住し、開皇十七年(五九七) 勅して五衆を立て、慧遷は十地衆主となった。『十地經』の第一人者で大禪定寺が建てられると召してそこに住した。

十五、釈慧因<sup>(57)</sup>(五三九—六二七) 姓は于氏、呉郡海鹽人。開善寺慧照法師に師事し、宝瓊法師に『成実論』を聴いた。鐘山に慧曉智瓊二禪師を訪ね、調心觀法を受けた。また長干寺僧弁に三論を学した。仁寿三年禪定寺が起つと召されて知事上座となり、禪学を指導した。三論を講じ文疏を製した。唐になると十大徳の一人となり、自ら範を垂れた。「定慧兩明、空有兼照、弘法四代、常顯一乘」といわれる。弟子に法仁がある。

十六、釈曇藏<sup>(58)</sup>(五二七—六三五) 姓は楊氏、弘農華陰人。名門の出身であるが十五で出家し、諸國を遊歴してのち、長安光明寺に住した。仁寿年に大禪定寺に入り、唐になると会昌寺の上座となった。興善寺主となるべき所を変って智閑を推した。『地持經』に通じ太宗等に菩薩戒を授けた。

十七、釈神迦<sup>(54)</sup>（五六六—六三〇）姓は田氏、馮翊臨晉人。学系や来歴は不詳。博く三藏に通じ多くの著作をあらわした。大業十年（六一四）召されて大禪定寺に入り、また鴻臚館で朝鮮留学僧に『大智度論』を講じた。

十八、釈僧鳳<sup>(55)</sup>（五七〇頃—六四〇頃）姓は蕭氏。名族の出身で、文章を善くした。開皇の始、僧粲の教えを受け、仁寿年、大禪定寺に住し、講解を事としたが、『涅槃經』『法華經』を得意とした。杜正倫等、士大夫との交渉が多い。

十九、釈道岳<sup>(56)</sup>（五六八—六三六）姓は孟氏、河南洛陽人。儒家の家系。十五で出家し僧粲に師事した。のち『成実論』『維心論』を志念、智通両師に学んだ。志念（五三五—六〇八）は当時を代表する行学の僧の一人で、その宗風は「虚宗」と称され、道岳もまたそれを継承している。真諦の弟子道尼が開皇十年（五九〇）洛陽に『摂大乘論』を開講するや従って教えを受けた。さらに『俱舍論』の研究に進み、本義を求めて南地に趣き、広州顯明寺で真諦口伝、智愷筆受の『俱舍論疏』および『十八部記』を得た。大業八年（六一二）大禪定道場（のちの総持寺）に入り、法常、智首、僧弁、慧明等に俱舍本疏を講じた。明曠、明略は兄弟であり、道岳の講席には若き日の玄奘（六〇〇—六六四）も列席している。

二〇、釈僧弁<sup>(57)</sup>（五六八—六四二）姓は張氏、南陽人。出家以前に『維摩經』『仁王經』を習し、早くから秀れた才を示した。靖崇を継ぐ智凝に『摂大乘論』を学し、大業初年、大禪定道場に召された。武徳年、各地を遊行し、講席を開いた。弘福寺が創建されると召されて住し、講義に励むと共に玄奘新訳の証義となった。道岳の『俱舍論』を聴くため自らの講論をとりやめて参じた。

二一、釈法常<sup>(58)</sup>（五六七—六四五）姓は張氏、南陽白水人。十九才で曇延に投じた。童真とは同門である。『涅槃經』に斬新な解釈を下し、のち摂論宗が興るとそれを随聞し、また成実、毘曇、華嚴、地論の各宗の比較研究を行なった。大業の始、勅して大禪定寺に入り、様々な講席につらなつた。僧弁と共にかつての弟子玄奘の新訳の証義を務め、また戒師として皇帝皇后に菩薩戒を授けた。

二二、釈道洪(五七一―六四九) 姓は尹氏、河東人。曇延に出家し、『涅槃經』を専らとした。のちに淨願に地論を學し、大業に禪定寺が創建されるとそこに住し、律藏寺上座、大總持寺寺主を歴任した。『涅槃經』を講ずること八十七遍であったという。

二三、釈曇遷(五四二―六〇七) 姓は王氏、博陵饒陽人。若くして道儒に秀れたが「留心莊易、得意仏經」で、初め曲李寺慧榮に投じ、曇靜に従って出家した。師と五台山に行つて神異を見、鄴下で諸學を修した。慧光の弟子曇邈に仏法綱要を禀求し、「學爲知法、法爲修行」と云い、世利を避けて林慮山淨國寺に入り、『華嚴經』『十地經』『維摩經』『楞伽經』『地持經』『起信論』を研精した。周武の法難に金陵に逃れ、道場寺で慧曉、智瓊、智晃と交つた。桂州で『撰大乘論』を得、隋の興るを聞いて建業を辭し、彭城に慕聖寺を建てて『撰論』の他、『楞伽』『起信』『如実論』等を講じた。撰論宗北土派の創開とされる。開皇七年(五八七)勅によって入京し、慧遠、慧藏、僧休、宝鎮、洪遵の五大德を率いて大興殿に拜謁し、共に大興善寺に住した。開皇十年(五九〇)文帝の行幸に従い、私度僧の救済を進言し、また寺院を修復させた。仁寿年間、宇内百余州に舍利塔を建立させた。また既に見た如く禪定寺寺主となつて禪門復興事業を推進した。その著に『亡是非論』等の他、『撰論疏』『楞伽經疏』『起信論疏』等がある。弟子は非常に多いが、主なものに、淨業、慧休、道哲、靜琳、玄琬、道英、法冲、明馭、靜凝、淨弁などがある。

二四、釈慧瓊(五三六―六〇七) 姓は王氏、滄州人。専ら戒學に励み、周武の法難を陳に避けた。のち北地に歸し、趙州に安居結業した。「其所開悟、以離著爲先、身則依附頭陀行蘭若法、心則思尋念慧、識妄知證」といわれる。仁寿年、禪定寺に召された。弟子に明胤、志超がある。

二五、釈靜端(五四三―六〇六) 武威人。慧端とも称す。僧実(四七六―五六三)に投じて印可を受け、のち僧実と同房の曇相(一五八二)に定業を習し、その遺囑を受けた。大業の大禪定寺に召され僧首となつた。戒德を高く評價された実践家である。

二六、釈慧歆(四)(五四二—六一〇) 姓は管氏、京兆雲陽人。官僚生活を経て三十七才で清禪寺曇崇(五一五—五九四)に定法を受けた。曇崇は菩薩僧百二十人の一人で興善寺に住した。俗塵を嫌い山居を志したが、大業の大禪定道場に召されそこで卒した。

二七、釈慧超(四)(五五五—六二四) 姓は申屠、上党潞城人。大興国寺に居して禅念を業とした。仁寿の禪定寺に召された。「偏執行途、不沿言説」といわれる。

二八、釈法喜(四)(五七二—六三二) 姓は李氏、襄陽人。七才で出家し、願禪師が親がわりとなった。願は「専修禅業、略於言誨」で荊州青溪山寺に居し、「昼則炊者薪蒸、夜便誦習經典、山居無炬、燃柴取明、每夕自課誦通一紙、如是累時」の生活で『法華經』を宗とした。仁寿年、大禪定寺に召されたのに従い、法喜も禪定寺に入った。同じく法華行者であった。

二九、静琳(四)(五六五—六四〇) 姓は張氏、南陽人。曇猛に投じ、後、慧覺(五三一—六二〇)に『十地經』を聴き、鄭都で智炬(五三五—六〇六)に『華嚴經』『楞伽經』『思益經』を聴き、その精理に通じた。しかし満足は得られず、師を尋ねて遊行した。蒲晋に道遜、道順が『十地經』を講ずるのを聴くが「法本治病、而今慢法更増、且道貴虛通、而今耽著弥固、此不可也」として講業を捨て、禅門を専修した。その様子は「初学不淨念処等法、又嫌其瑣小煩稽人慮、乃学大乘諸無得観、離念唯識弥所開宗」と記される。のち曇遷の『摂論』を聞き機が契った。のち各地に『摂論』を講じ、召されて道場に入った。その具名は記されていないが大業の禪定寺であろう。多くの道友、士大夫と交り、各地を遍歴したのち、義寧二年(六一八)大総持寺に召された。

三〇、釈慧斌(四)(五七四—六四五) 姓は和氏、兗州人。經書芸文に通じたが二十三才で出家し、各地で経律を聴くも喧騒に倦み、五台山、泰山に入って定業を修した。戒業に秀れ、仁寿の禪定寺に召された。

三一、釈普明(四)(生没年不詳) 姓は衛氏、蒲州安邑人。外兄道慈に出家し、童真的弟子となった。講席を周遊し十八才

で『勝鬘經』『起信論』を講じ、進具ののちは『涅槃經』『四分律』『撰論』を専らとした。大業六年大禪定道場に召され、のちに仁寿寺に住した。戒業に秀れた念經の行者であった。

三二、釈覺朗(生没年不詳)河東人。大興禪寺に住して『四分律』『涅槃經』を明した。大業末年禪定道場主となり、ほどなく卒した。

三三、釈智保(生没年不詳)河東人。若くして入道し、護戒を事とした。はじめ勝光寺に住しのち禪定寺に居した。慧滿と道友である。

三四、釈智首(五六七―六三五)姓は皇甫氏。僧稠(四八一―五六一)の弟子智旻に投じて出家し、戒学を専らとした。道洪の講律を聴き、道洪が禪定寺に召されるに際し、「若不附定通戒、行学無帰」として従って禪定寺に入った。律典を深くきわめ、大業始め、大禪定道場(後の総持寺)に追住し、貞観の新訳にも携った。のち弘福寺に召されて僧綱となった。律宗九祖の一人であり、道宣の師でもある。

三四、釈慧璣(五八〇頃―六三四)姓は呉氏、楊州江都人。幼にして出家の志があり、衆法師に帰依しその『撰論』を聞いた。仁寿年中、衆に従って禪定寺に入った。具戒後、洪遵、智首に律儀を学び『撰論』を講じた。大業末の戦乱にまき込まれたが禪定寺を守るに功があった。

三五、釈慧滿(五八九―六四二)姓は梁氏、雍州長安人。七才にして出家し、大興善寺に住し仙法師の弟子となる。仙の為人は不明、師に従って三善寺を聞て大業の始め、大禪定寺に住した。年令から見て、大僧としてではない。のち受戒し、智首に従った。貞観七年(六三三)弘濟寺上座となり律を弘めた。

三六、釈明贍(五五九―六二八)姓は杜氏、恒州石邑人。応覺寺に出家し、大集寺道場法師に『大智度論』を学した。開皇三年(五八三)大興善寺に住した。大業年、僧の皇帝への拜不拜の問題が生じた時、一人煬帝に不拜を通した。煬帝の語として、「朕謂京師無僧、昨南郊中亦有人焉。」が伝わる。のち勅して禪定寺に住し、知事上座となって僧務

を整理した。唐になってからも帝に進めて仏教的施策をとらしめた。

三七、釈道英<sup>(四)</sup>(五六九―六四五) 姓は陳氏、蒲州猗氏人。智炬の下で『華嚴經』等を聴き、開皇十九年(五九九)太行山栢梯寺で止観を修した。のち勝光寺で曇遷に『撰論』を聴き、大旨を会した「聴謝之暇、常供僧役、有慕道者、從其所為、因事呈理、調伏心行、寄以弘法、常云、余冥目坐禪、窮尋理性」と記される。のち禪定寺に入り、大業九年(六一三)直歳となった。晩年、普濟寺に住した。道遜とはもと同学である。

三八、釈明璨<sup>(四)</sup>(一六二〇頃) 姓は韋氏、莒州沂水人。『成実論』『涅槃經』を学し、周武の破仏を林沢に避け、五七九年、宣帝が陟岵寺を開くや慧遠に従って入寺した。のち大興善寺に住し仁寿起塔に神異を示し晩年大禪定に住した。

三九、釈僧蓋<sup>(四)</sup>(生没年不詳) 恒州人。専ら『涅槃經』を聴くが、「聞經陳念慧、撰慮為先」と聴講をやめ定学に専思した。のち大興善寺に住し、仁寿起塔に神異を示し、晩年大禪定寺に住した。九十余才という。

四〇、釈法周<sup>(四)</sup>(一六三〇頃) 姓氏不詳。静覺寺に住し風月を友とした。仁寿建塔に参与し、のち大禪定寺に住した。八十余才という。

四一、釈明馭<sup>(四)</sup>(生没年不詳) 瀛州人。『涅槃經』『撰論』を学し、さらに曇遷に『撰論』を学んだ。仁寿起塔に靈異を示し、仁寿の禪定寺に召された。

四二、釈法性<sup>(四)</sup>(生没年不詳) 兗州人。少にして禪学を習し、頭陀行に励んだ。のち召により勝光寺に住し、仁寿起塔に参じ、大業の禪定寺に入った。八十余才。

四三、釈淨弁<sup>(四)</sup>(一六一五頃) 姓は韋氏、齋州人。道儒に通じ、俗を厭い山林に居し、禪門を受習し息縁静慮した。開皇年、慧遠に依止して淨影寺に住し、更に曇遷に『撰論』を受けた。仁寿起塔に南岳に赴き靈異を見聞し、『感應伝』を著した。のち禪定寺に寂す。

四四、釈慧超<sup>(四)</sup>(五四六―六二二) 姓は汎氏、丹陽建元人。『法華經』を誦し、南岳慧思を慕って智顗、仙城慧命と共に

に光州大蘇山に参じた。嵩山を経て、悟真寺に浄業と会い、八年三慧を共に修した。大業の禪定寺に召され道を行じ、たが帰山的心強く、後許されて帰山した。

四五、釈善慧(五八七—六三五) 姓は荀氏、河内温人。群籍に博通し、出家後は彭城寺に『法華經』を誦し、また『摂論』を聴いた。長安に吉藏(五四九—六二三)が『法華經』を講ずるのに会い聴受した。「藏既闡揚、勇心承旨、望通理義、由情存兩得、不暇忍寒、欽笑熙熙、如寶獲宝、竟冬常爾、衆方美之、問以詞旨、片無遺忘、乃以聞法、同属禪定寺。」とあり、この時期吉藏も禪定寺にあったのかも知れない。

四六、釈空藏(五六九—六四二) 姓は王氏、雍州新豐人。私度僧。藍田負兒山で禪誦を修し、のち三論の道判(五三二—六一五)に依正し、龍池寺で三論涅槃を学した。大業始め、禪定寺に召され、唐になって勅により会昌寺を建て度僧した。山居を好んだが、衆經の大乗要句を鈔摘して卷部を成した。

四七、釈智興(五八八—六三二) 洛州人。諸經数十卷と行法要偈数千行を誦した。若年より仁寿の禪定寺に入り、初め智首に随った。大業五年(六〇九) 維那となり、寺務を司った。

## 五

『統高僧伝』習禪論には次の様にいう、

隋祖創業、偏宗定門、下詔述之、具広如伝。京邑西南、置禪定寺、四海徵引、百司供給。来儀名徳、咸悉暮年、有終世者、無非坐化。具以聞奏、帝倍帰依。二世續曆、又同置寺。初雖詔募、終難講徒、故無取矣。

その記録から、大禪定寺と関わりのある事が明らかな禪師はほぼ前節の如くであるが、もとよりこれが實際に大禪



定寺に関与した人々の全てではない。筆者の検索洩れもあり得るし、道宣の記載が不十分なため、それと確定し得ない者も一、二にとどまらない。更には当時、禪定寺に住した人々が全て列伝された訳ではないことは道宣自ら語る如くである。従ってここに得られた資料はごく部分的なものでしかないが、それでも凡そ十五年間に、かくも多くの高僧名徳が一堂に会した例は他に大興善寺以外は見当らず、しかもその大興善寺は大禪定寺と密接な関係にある。それ故この事件のもつ思想的意義は極めて大きいと言わねばならない。

列伝された諸禪師は、『続高僧伝』の分類に従えば、義解、習禪、明律、感通、読誦、興福にまたがり、それはそれで一つの目安を与えはするが、これらの分類が便宜的なものにすぎぬのは自明であり、いずれも先に見た如く教学理解の秀れた実践家である。道宣の選択にも抱らず、両禪定寺の別を明確にすることは不可能であるが、今それらの諸禪師の特徴をいくつかの傾向によって分類すれば以下の如くである。

一、隋朝の重要な国家事業である仁寿起塔に関与した者。

二、大興善寺の五衆の衆主を務めた後、移住した者。

三、諸学に通曉した者。特に摂論、三論、大論、地論が多く、これは先の五衆と関係する。

四、南地から召された者。

五、当初は単に師に随従した者。

こうした修学の経歴や傾向を異にする実践家が、シナ全土から参集すれば、そこでは当然相互の交流・干渉が生じる。彼等が日常如何なる営為を行なったかは道宣の記録のみでは不分明な所が多いが、こうした横断的な関係とその結果が次代のシナ仏教に重要な影響を与えたことは想像に難くない。例えば、曇遷に次いで禪定寺の中心人物となった保恭は、その教えを受けた師として、三論系統では僧詮——法朗を次ぐ茅山大明、同じく僧詮下の摂山慧布があり、慧布は南岳慧思、慧可と交流がある。従って禪、天台とも関連するのであり、天台系統では別に仙城慧命を継ぐ慧暁

を稟けており、その関係から疊遷、慧因とは兄弟弟子でもある。さらに、系統は分明ではないが、定学に秀れた僧定、成実の開善徹『地持経』、『十地経』を得意とする疊崇にも師事しており、いわば当時の著名な学风には全て接触しているといつて良い。そしてこうした傾向は多かれ少なかれ他の諸禅師にも共通しており、それが更に禅定寺で重複し合い、次代に継承・展開される関係になる。即ち、いいかえるならば、統一国家隋の中央集権的な力が仏教諸派の法系の固定を破り、横断的關係を強制することによって、シナ仏教の展開を促進したといえる。

『続高僧伝』はその性格上、列伝された諸師の教学思想にまで立ち入る事はほとんどない。また、後のシナ仏教史の宗派系列に乘らぬ人々の著作は、ほとんど残存しておらず、縦って彼等の具体的な思想を知る手がかりは充分には与えられてはいない。しかし少くとも次のことは云えるであろう、即ち同時代人である智顗や吉藏に見られる博引傍証振りは彼等にも共通していた、と。そして、達摩および慧可の事歴から明らかな如く、初期禅宗も完全な都市仏教であり、また従つて教学的側面を濃厚に有していたことは例えば『二入四行論』をはじめとする初期の禅籍からも明瞭である。

『続高僧伝』慧可伝や法冲伝に多くの弟子の名が挙げられており、こうした諸禅師も、道宣の他の例から推しても、他に立伝・関説されること一・二にとどまらぬはずである。本稿はそれらの人々の検索と、更には先にみた大禅定寺の諸禅師や『二入四行論』長卷子との関係を明すための、準備作業の役割をもつものである。

もちろん長安の繁栄も仏教史から見れば、部分的な現象にすぎず、全ての実践家が集結した訳でもない。都市とは無関係に、むしろそれを峻拒して隠棲し続けた実践家も少なくない。しかしのちの禅宗の母胎は明らかに都市であり、初期禅宗が理論的色彩を有し続けたことは周知である。従つて都市の動向を知ること、初期禅宗史研究にとって必須の作業なのである。不十分な論述でしかないが、前稿に引き続いて、いく分かの作業の進展が見られたと思うのでひとまず稿をとじる。

(註)

- (1) 『魏書』百十四卷、釈老志、百納本二四左。『塚本善隆著作集』第一卷、東京、一九七四、二五一頁。
- (2) 『洛陽伽藍記』卷四、永明寺章、大正五一卷一〇一五中下。入矢義高訳『洛陽伽藍記』中国古典文学大系21、東京、一九七四、八四頁。
- (3) 拙稿「初期の習禪者達」仏教学第十二号、東京、一九八一、二五頁以下。
- 『統高僧伝』十六、僧可伝には、  
天竺沙門菩提達摩、遊化嵩洛、可懷宝知道、一見悦之、奉以為師、…(中略)…達摩滅化洛浜、可亦埋形河湫。  
(大正五〇、五五二上)
- とあり、洛陽を離れることはなかった如くである。ここに嵩洛とは洛陽を指す。
- (4) 『洛陽伽藍記』序、大正五一卷九九九上。入矢訳三頁。
- (5) 『統高僧伝』十六、大正五〇卷五五一下、五五二上。
- (6) 同右、五五二上、下。
- (7) 孝静帝は天平元年(五三四)洛陽の四十万戸をひきいて鄴に移ったが、とりあえず相州を居所とした。『塚本善隆著作集』第一卷、四七頁。
- (8) 『弁正論』三、大正五二卷、五〇八下。なお、『歷代三宝紀』十二、には、  
開皇三年降勅旨云、好生惡殺王政之本、仏道垂教善業可遷、稟氣含靈唯命為重、宜勸勵天下同心救護、其京城及諸州官立寺之所、毎年正月五月九月、恒起八日至十五日、當寺行道、其行道之日、遠近民庶、凡是有生之類、悉不得殺。(大正四九、一〇八上)とある。
- (9) 『弁正論』三、大正五二卷五〇九中。
- (10) 『塚本善隆著作集』第三卷、東京、一九二五、一三一頁以下。
- (11) この時代の渡来僧は『統高僧伝』によれば、那連提黎耶舍(ナレインドラヤシャス)、闍那崛多(ジュニヤナグブタ)、達摩笈多(ダルマグブタ)等少数の訳経僧を数えるのみである。(大正五〇、四三二上、四三六中)
- (12) 山崎宏『中国仏教・文化史の研究』京都、一九八一、一一頁以下。
- (13) 『統高僧伝』四。玄奘伝には次の如くいう。大業余曆、兵饑交貿、法食兩緣、投庇無所。(大正五〇、四四六下)
- (14) 結城令聞「隋・西京禪定道場釈曇遷の研究」福井記念・東洋思想論集、東京、一九六〇、七〇八頁以下。
- 拙稿「初期の習禪者達」三八頁以下。
- (15) 『統高僧伝』十八、大正五〇卷五七三下。
- (16) 同右。
- (17) 『隋書』二、百納本一六オ。同三六、五ウ。
- (18) 『統高僧伝』大正五〇卷、五二二中、五二六下、五八二上、五九一中、六七四下。
- (19) 『釈氏稽古略』二、

仁壽三年、帝以皇后崩、乃於京邑西南置禪定寺、建塔七級、勅有司、迎遷禪師主之、召海内名德禪師一百二十人、同居行道。(大正四九、八〇九下)

なお、『仏祖統記』三九は、文帝十四年(五九四)の項に、詔建禪定寺、召曇遷法師、集海内名德百二十人以居之。

(大正四九、三六〇下)

とするが、他に補強証拠もないのでここではとらない。

(21) 『統高僧伝』大正五〇巻五〇二中。

(22) 同右、五一八上、五一九下、五二〇中、六七五上。『弁

正論』三、にも「大業元年為文皇帝、造西禪定寺、(大正

五二、五〇九中)とあり、「為獻皇后、造東禪定寺」(大

正五二、五〇九上)とある。なお、靈幹伝には

大業三年置大禪定、有勅摺為道場上座主。(五一八下)

とある。

(23) 『統高僧伝』大正五〇巻六三二下。

(24) 『法苑珠林』一〇〇、大正五三巻一〇二六中。

(25) 注(2)参照。

(26) 『統高僧伝』大正五〇巻五一三上。

(27) 同右、六九五中。

(28) 同右、五九九中。

(29) 同右、六八九下。

(30) 同右、五二七下。六一四下。

(31) 同右、五九〇下。

(32) 『宋高僧伝』大正五〇巻、八三二中、八六二下、八八〇

下。なお、『神僧伝』大正五〇巻九九九中参照。

(33) 『西陽雜俎』今村与志雄訳、東洋文庫332、東京、一九八〇、一巻二六八頁。

(34) 『宋高僧伝』十六、大正五〇巻八〇七中。なおこの記事

から、六〇五年創建の禪定寺が總持寺であることが類推し

得よう。

(35) 山崎宏『隋唐仏教史の研究』京都、一九六七。

(36) 『統高僧伝』大正五〇巻五〇二上中。

(37) 同右、五〇二下。

(38) 同右、四八四上。

(39) 同右、五七一下。

(40) 同右、五〇四下、五〇五上。

(41) 同右、五〇六中下。

(42) 同右、五〇七下、五〇八上。

(43) 同右、五一一上中。

(44) 同右、五二二上、下。

(45) 同右、五二二下、五二三上。

(46) 同右、五七九中。

(47) 同右、五七九中下。

(48) 同右、五二七下、五一八上。

(49) 同右、五一八上、下。『法苑珠林』にも引かれるが、そ

こでは没年を武徳初(六一八)とする。(大正五三、四〇

八中)

(50) 同右、五一九上、下。『珠林』四〇二下。

- 60 同右、五二〇上中。  
 61 同右、五二〇中下。  
 62 同右、五二二上中。  
 63 同右、五三二下—五二六上。  
 64 同右、五二六上中。  
 65 同右、五二六中下。  
 66 同右、五二七上—五二八下。  
 67 同右、五四〇上—下。  
 68 同右、五四〇下—五四一中。  
 69 同右、五四七上中。  
 70 同右、五七一—五七四中。  
 71 闍那崛多伝には、  
 爾時耶舎已亡、專当元匠、於大興善、更召婆羅門僧達摩  
 笈多、並勸居士高天奴高和仁兄弟等、同伝梵語、又置十  
 大德沙門、僧休・法聚・法經・慧藏・洪遠・慧遠・法翼  
 ・僧暉・明穆・曇遷等、監掌翻事、銓定宗旨。(大正五  
 〇、四三四上中)  
 とする。  
 62 『弘明集』一七、大正五二卷二一三上、以下。  
 63 『孔目章』中に引用される。(大正四五、五八〇下—五  
 八一上)『統高僧伝』曇遷章にはその前半の一部が引かれ  
 ている(大正五〇、五七三上中)。結城令聞前掲書参照。  
 64 『統高僧伝』大正五〇卷、五七五上中。  
 65 同右、五七六中下。

- 66 同右、五七七上中。  
 67 同右、五八一下—五八二上。  
 68 同右、五八七上—五八八上。  
 69 同右、五九〇上—五九一中。  
 70 同右、五九一中下。  
 71 同右、五九八下。  
 72 同右、六二二上中。  
 73 同右、六二二下—六二三中。  
 74 同右、六一四上—六一五上。  
 75 同右、六一五上—下。  
 76 ここに栄法師とは曇榮(五五四—六三九)らしいが、曇  
 榮伝(大正五〇、五八九上以下)には該当する記述はない。  
 77 『統高僧伝』大正五〇卷六一八上—下。  
 78 同右、六三二下—六三三中。  
 79 『集沙門不応拝俗等事』二、大正五二卷四五二中。『統  
 高僧伝』では、「我謂国内無僧、今驗一人可矣。」とあり、  
 明證を指す。  
 80 『統高僧伝』大正五〇卷六五四上—六五五上。  
 81 同右、六六九上。  
 82 同右、六七〇上。  
 83 同右、六七二上中。  
 84 同右、六七四下中。  
 85 同右、六七五上。  
 86 同右、六七六下—六七七上。

- ⑧ 同右、六八七中下。
- ⑨ 同右、六八八中下。
- ⑩ 同右、六八九中下。
- ⑪ 同右、六九五中下。
- ⑫ 同右、五九七上。
- ⑬ 山崎宏『支那中世仏教の展開』京都、一九七一、二九八頁以下。平井俊栄『中国般若思想史研究』東京、一九七六、四二頁以下。拙稿「初期の習禪者達」三八〜九頁。
- ⑭ 柳田聖山『ダルマ』人類の知的遺産16、東京、一九八一、に従来成果が総括されている。